環・未ネットだより

しまもと環境・未来ネット（島本町環境基本計画推進活動）

HP<http://www.kankyo-mirai.net/> <FB_.facebook.com/kankyo.mirai.net/>

「環・未ネットだより」５号

発行：しまもと環境・未来ネット
2018 年４月

連絡先：島本町役場環境課内

Tel:075-962-2863

Fax:075-961-6298

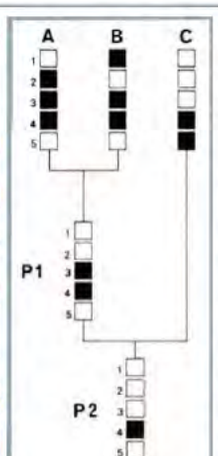
ご挨拶　（しまもと環境・未来ネット　代表：金山　勉）

活動を「どうぶつ分類学」で楽しみましょう

年度もあらたまり、新たな活動が始まろうとしています。

野外での自然観察会等のイベントを楽しみにしている方も多いと思います。いきものを見つけて、形や色の違いから区別して名前を付けることを分類と言い、自然を理解する上で大きな助けとなります。この様な学問が分類学です。いきものの進化過程を反映し、体系化する事を系統分類学と言います。この分類学について、簡単に紹介します。

いきものの名前には、国際的な規則があります。動物については「国際動物命名規約」、植物については「国際植物命名規約」により、その取扱い方法が決められています。これ以外に、栽培植物に関しては、農学諸分野の命名における統一、正確性、安定性を図るために「国際栽培植物命名規約」があり、不定期に改正されています。植物に関しては、詳しくありませんので、動物について、言及します。いきものの名前は、国際的に通用する学名と様々な地域で呼ばれている俗名とに大別されます。学名には、18 世紀のスウェーデンの生物学者リンネが提唱した「二名式命名法」を適用しています。この命名法は、１語（ひとつづり）の属名と１語の種名を組み合わせたものを種の名前としています。すなわち、日本人の姓名と同じような呼び方です。例えば、学名　*Plecoglossus altivelis* は、日本ではアユ、アイ（富山など）、エノヨ（庄内地方）などの俗名で呼ばれています。なお、日本ではアユを学名に準拠する標準和名として扱っています。



例：魚のクラドグラム（分岐図）

昔の学名はラテン語かラテン語化した言葉のどちらかということでしたが、最近は、ラテン語以外の言語や、ただ単に文字を組み合わせたものであっても良いということになっています。種の名前である学名には名称を客観的に照合するための模式標本（標準となる個体）が存在し、分類の基準となっています。また、この規約の適用範囲は科、属、種、亜種までとなっています。綱、目、品種、変種などの分類群は規約の適用外となっています。リンネが動物と植物を分類し、階層構造に体系化しました。これをダーウインは進化による類縁性を手掛かりに自然分類が出来ると考えた。これが系統分類学です。系統分類学には、伝統的な分類学、分岐分類学、数量分類学の３つの考え方があります。

伝統的な分類学では、いくつかの形態（形質）の類似性を主観的に選んで分類を行います。形質の評価は研究者の裁量に任されているため、科学的でないと批判されています。そこで形質の評価に主観が入り込まないように、種の違いを示す形質を多数取り上げ、相対的な類似度に基づいて分類する数量分類学が提唱されました。これに関しても、形質の評価において、論理的な欠陥が指摘されています。一方、数量分類学と同時期に、ドイツの昆虫学者ウィリー・ヘニッヒにより種の共通祖先、祖先－子孫関係を用いる分岐分類学が登場しました。分岐分類学では、系統関係をあらわす形質には原始的な形質（祖先が持っている形質）と派生形質（原始的な形質から変化した形質）の２種類があり、派生形質を共有するいきもの（種）を同じグループにするという方法です。分岐分類学は、ヘニッヒの提唱後、批判も相次いだが、次第に定着してきています。この方法を用いて、いきものは系統関係に従って配列され、クラドグラム（分岐図）としてあらわされることになります。このように、いきものの進化は視覚化した形で描かれることになります。

非常にこ難しいことを書きましたが、系統分類学の目で、野外のいきものを眺めるのも面白いと思います。

活動紹介

こんにちは。運営委員の岡です。しまもと環境・未来ネットの川の美化推進活動に所属しています。
2015年、「里山クラブ」に入会、現在も活動させてもらっていますが、メンバーは全員川美化の活動も行うことから、しまもと環境・未来ネットの会員になりました。
里山クラブに入会するまでは、島本で生まれ育ち、島本の自然を誇りに思いながら、その自然を守ることに関わってきませんでした。入会してみると、竹や木々、土、川などの自然に囲まれて活動することが、とても気持ちの良いということを知りました。ありきたりの表現ですが、マイナスイオンを感じるというか、とても心地よく感じながら活動しています。
休憩時間は、一緒に活動する人生の大先輩の皆さんのユニークなトークが楽しい時間です。元々、里山クラブを紹介してもらった方が、自分が中高生時代に生徒として、大学生以降、講師としてお世話になった塾の塾長なのですが、最近、その講師時代の教え子（今は社会人）が里山クラブに関心を持ち、今度は私がその教え子に里山クラブを紹介し、先日体験に来てくれました。里山クラブの中で、このような縁で世代が繋がっていくことが感慨深い出来事でした。
暮らしのすぐそばに自然が溢れる島本、町内外にこの自然に触れてみたい方が沢山いると思います。島本の里山の中で、世代を越えて、地域を越えて、色んな方が交流できるようなると良いなと思います。そのためにも、会の活動に継続して参加し、その発展に協力できればと思います。　（岡　正樹・記）

川の美化推進活動グループ　（主に、水無瀬川の中・下流域の、支障木・竹の伐採をすることで川の景観を良くし、不法投棄ゴミを捨てづらくする、や捨てられたゴミの撤収も行っています。　月一回の定例活動です。）

先ずはラジオ体操で体を解します

生い茂った竹も適度に間伐整理

誰が捨てたか色んなゴミがあります

いきもの観察グループの活動報告

生き物観察グループではこれまで文字通り、島本の山や河川敷などで生き物観察をしてきましたが新しい試みとしてカブトムシビオトープにチャレンジしてみました。
場所は清掃工場近くの山の雑木林です。アベマキやコナラなどのカブトムシが好きそうな樹木がところどこに生えています。
合板と杭を使って囲いを作り、中に周囲の落ち葉をとんどんいれて完成です。たいへん簡単でたぶん小学生の高学年ぐらいから作成可能ではないかと思います。合板ではなく間伐した木などを使えばより一層野趣あふれるものにもなりますが今回は簡易に作ってみました。世の中には同じようなことをやっている人もたくさんいて、たい肥を入れたらいいとかいろいろな蘊蓄もあるようですが、そこまでしなくても比較的成功する確率は高いようです。もとより島本にはカブトムシはいっぱいいるとのこと。私は島本に長らく住んでいますが残念ながらこの地でカブトムシを見つけたことはありませんので是非、今回幼虫をみてみたいものです。
後はイノシシがおいしい蛋白源として食べ尽くさないかが心配ではありますがとにかくこの秋を楽しみにしています。我々グループとしてはここからどういうイベントにできるかを話し合っていきたいなと思っています。　（厚東　隆・記）

カブトムシビオトープ．周囲にたくさんの落ち葉があるのがわかります。

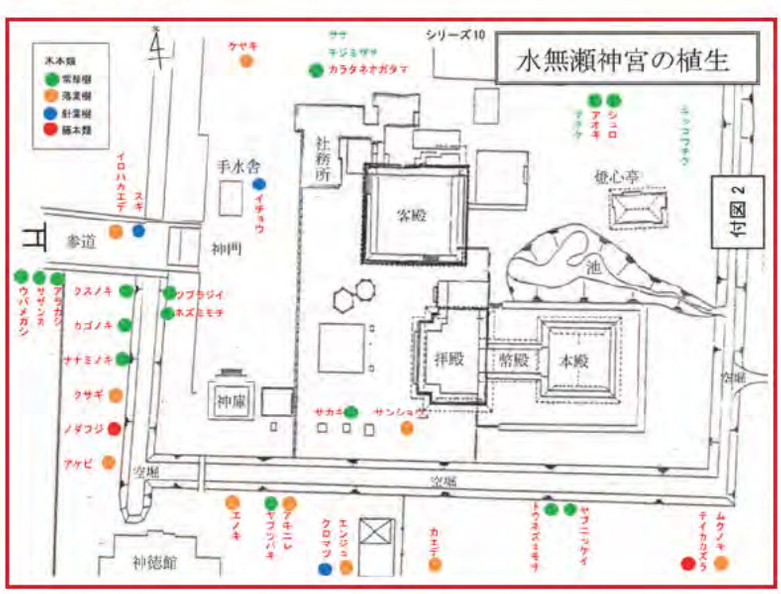
活動紹介

緑の探索グループ（島本町内の緑を探索、見つけた植物の名前をマップに記して行くことで、植生を知ります。）

一般参加者を募集しての、「第 5 回 緑の探索ウォーク (2017.10.28)「水無瀬神宮の植生調査」は台風のため中止となりましたが、前もってメンバーが水無瀬神宮の植生を調査し , まとめたものをご紹介します。
なお、この時期に緑の探索グループの柱であった中村卓二さんが逝去されました。ご冥福をお祈りします。
一般的に、常に掃き清められている場所は拝殿となり、人が手をいれずに自然のままにしてきたところは杜となっています。神社林を探索することは大変に興味深いです。

・水無瀬神宮 植生の特徴
カゴノキ、アラカシ、アオキ、ヤブツバキ、ナナミノキ、ネズミモチなど これらの木は市街地を離れた水無瀬川の谷筋や、丘陵地・山地に入ると多く見られ る。古くは神宮周辺に普通に生えていたものが、農地・人家・道などによって次第に分断され、この一角が神社林として保存された。
町の古い植生の一端を知る貴重な場になっている。
故中村卓二先生『島本町 植生の概要』資料より転記

・調査本数は 96 本です。そのうち、草本類の 4 種を除き全て木本類となります。名前を 確定できなかったものもあります。シダ類は少なく、確認していません。分類別で見ると、常緑樹 43 本、落葉樹 33 本、針葉樹 4 本、ツタ類 2 本、その他となり、樹種別ではエノキ 14 本、クスノキ 10 本、ムクノキ 8 本、モミジ 7 本、アラカシ、カゴノキ各 5 本、その他となります。「水無瀬神宮 植生の特徴」にある通り、水無瀬川の谷筋や丘陵地・山地によくみら れる木が確認できました。
・調査樹木のうち、幹回りがおよそ 300 cm を超える巨樹・巨木は 4 本あります。特に、参道横西側駐車場・神門寄りのクスノキ、社務所北側のケヤキは枝ぶりもよく、樹高 20m 近い大木で、空を覆い隠すように枝・葉が広がっています。
・これら調査樹種のうち「しまもと植物探索マップ (水無瀬神宮の植生)」(付図 2) に 記載種は木本類 30 種、草本類 4 種としています。



幹回りについて
環境省「巨樹・巨木データーベース」では、地上高 130 cm での幹回りが 300 cm 以上の樹木を巨樹・巨木と定義しています。
幹周りは地上から 130cm の高さを、センチメートル単位で測ります。メジャーを幹に当てて、くぼみや空洞に関係なくメジャーの左右を引っ張り、ピンと張った状態で 計測します。斜面に生えている木は、山側 (高い方) で地上 (根 元) から 130cm の 高さで測ります。斜面が急で谷側 (低い方) に降りられないときは、山側から測量ポ ールで直径を測り、幹周りを計算します。130cm の高さで幹が複数に分かれている場合、幹回りは複数の幹の合計になります。
（環境省ホームページより）

（調査の一部）

緑の探査活動報告（吉村英明・記）より抜粋

エコ生活部会

「食べ物は命の糧　フードバンクって？」(2018/2/18) を、講師に浅葉めぐみ（フードバンク関西理事）さんを招いて講演会を開催しました。

“食品ロスの現状を知り削減のために一人ひとりが「もったいない」を意識して行動することから始めましょう”、と言う主旨で、聴講に来られた方々により理解していただけるように、講演を聞いたあと、” ワークショップ” を計画しました。が、スタッフ（環境学習部会）から、” ファシリテーター役など難しい” と尻込みされたのでワークショップは諦めました。

活動紹介

［エコ生活部会のつづき］

講演終了後の質問時間に、聴講された年配の方から、”戦争を経験した者にとっては食べ物をむだにするなど考えられないこと・・”、と感想がよせられました。が、現在の食品ロスの問題は、制度や商業慣習や消費者の意識に深く根ざしていて一筋縄ではとらえきれません。

フードバンクの活動は、1967年にアメリカ・アリゾナ州のキリスト教牧師がスーパーマーケットのまだ食べられる余った食品を貰い受けて困窮者に配る活動から広がったそうです。EUは、パリで1984年から、韓国は、1998年から試験事業として、社会福祉協議会が全国的にフードバンクの役割を担うことを開始し、2006年には、食品を寄付することを促す法律を制定しました。

余談ですが、韓国を訪問するとおもてなしに、テーブルにスゴイ分量の料理が並べられ食べきれないことがあります。こうした習慣がかえって、日本よりも先にフードロスの問題に国をあげてとり組むことになったのかもしれません。　日本での取り組みは2000年に東京で、関西では2003年、そして小さな規模の団体の活動にささえられている現状の遅れがあるそうです。

フードバンクが集めた食品は、①福祉施設へ食料提供、②行政との協働で食のセーフティーネット、③こども食堂へ食品提供、などにつかわれているそうです。

浅葉さんの話には出ませんでしたが、エコ生活部会では島本町の子ども食堂を注目していて、ファミリー農園などで出た、余剰農産物の提供を呼びかけています。

子ども食堂開催日に「コープ島本」のサービスカウンターに是非お持ち下さい！（開催日等も含めて要連絡）

エコ生活部会の重点プロジェクト、「再生可能エネルギーを島本で」でウォッチしている高槻バイオマス粉炭研究所の「粉炭で発電」の実証試験が始まり、発電したそうです。現在は、まだ調整の段階でデーター収集をやっています。クラウドファンディングで、実証実験の資金を募集したところ約300万円ほど集まったとか、4月には運用が出来るようです。　さて、島本でこのシステムを導入して電気の地産地消が実現するでしょうか。

編集

環境学習部会（毎月1回の定例部会で、どのような講演会を開催するかなど話し合っています。）

- 10月14日　「聴竹居」見学会
- 10月21日　「環境共生住宅［聴竹居］に学ぶ」、講師：松隈　章さん
- 11月18日　「環境と防災の為の地下水管理」、講師：中川　康一さん
- 11月30日　「国立森林総合研究所関西支所」、見学と講座受講
- 1月13日　「農と自然」、楽農クラブと共催、講師：堀　悦雄さん
- 1月20日　「瀬戸内海の水環境行政」、講師：小林　悦夫さん

「聴竹居」見学会と講演会

建築家、藤井厚二が日本の住宅の理想を追求して建てた私邸です。竹中工務店勤務の松隈さんは、先輩の建てた、個人の住宅でありながら、風土に即した普遍性を有している価値ある建物と考え、保存する方法を模索、現在の一般公開と保存と、言うことにされました。

「農と自然」講演会（楽農クラブと共催）

「百姓は楽しいです」と言われる、堀悦雄さんの講演会を共催しました。耕作放棄の田んぼを借受けて40数才で百姓を始められ、今は食べられるようになった。田んぼも、畑も、野生動物、昆虫も、皆がいろんなことを教えてくれる、と言われます。

「国立森林総合研究所関西支所」見学会と講座受講

樹木園と森の展示館を見学し、講堂で研究員による講座を受講しました。

展示館は、「里山と人との関わり」をテーマにしています。展示室を暖めているペレットストーブは、通常のペレットではなく、「トレファクション」と呼ばれる半炭化処理のもので性能が高められています。

会員を募集しています、ご一緒に活動しませんか！

お申込み・お問合わせ：町役場2F環境課カウンター
Tel:075-962-2863　Fax:075-961-6298
HPもしくはFB＜しまもと環境・未来ネット＞

◎「島本町環境基本計画」に即した、新規のプロジェクトご提案も歓迎します。